

# 棲神の意義

室 住 一 妙

○ことし昭和四十八年（一九七三）は、宗祖身延御入山第七〇〇年に正当する。この年に当って棲神の意義について考えてみたいと思う。棲神とは漢学趣味の言葉らしいが、凡そのイミは「宗祖日蓮のお魂が永遠にこの山にすみたまうお山」というのであろうが、が果して宗祖がそういうイミのことを仰せられていたであろうか。類似した御文句の真意はどう理解すべきであろうか。それはしばらく措き、棲神という二字が、いつ誰に造語されたのか、どの系統で使用されてきたのか。多分は身延の門流で祖廟を中心に本寺参詣御留魂の聖地を宣伝するための御書を偽作したかもしれない。しらべてみれば又一ふし面白い点もあろう。がしかし今日、七〇年代という今日、世界はどうなる？というよりも、もっと切実な問題は青い地球をとり戻そう、いやそうしなくてはならない、繁栄というよりは人類全体が健やかに生きていくという第一義？の問題にもつながっている。そういう時代がやって来つつあるのである。お互い人間は常識的にも最高の霊長動物であるし、それが足してる地球も、この宇宙空間にかけがえのあり得る球ではないらしい。こういう宇宙的イミからしても、本とうに人類も世界もお互が真剣に考えなくてはならない世紀末にさしかかったのだ。

何事でもそうだろうが、○○年記念というのは、数の多量とか帳切れのよさが、おめでたいのではなく、お祭りさわぎが面白いのでもなく、そのチャンスにその時代人が挙ってその事を考えてほしいというのが、本当に良い意味の記念祭典なのではなからうか。この愚考にたよって今ひそかに考える。

時代が百年経てば経つだけ世の変わり代りがあり、まして三、四、五百とくれば、大へんな変りようともなう。そういう変曲のうちに、またはそとに、どう見直さなくてはならぬだろうか。

たしかに現在、身延山はかくの如くある。人口一万二、三千の小町に立つ丘陵、その一角に廟あり寺院あり、それが七〇〇年前、その人が居ったというだけの名残りの地境。ここにある山の二つ三つ、大した産物も景勝もあるわけでもなし、幾百年つづいても何の予想もなからうが、それを、「神の棲む山」とは一体どうして出てきたのか。どう考えなくてはならぬのだろうか。その人の生命が魂が念願が生きてくるならば、それがそのままこの地境にも地球にも宇宙にも波及していくだろう。そう考えて始めて「身が延びる……久遠に」となっていくだろう。一人の豪傑が埋葬されてるだけではなく、偶像が祀られてるのではなく、むしろ偶像から脱け出た人、大きく脱け出ようとした御大が日蓮その人ではなからうか。他を喰いものにしたたり、足場にしたり、カザリものにしてそうして成り上った聖者ではなしに、それこそあらゆる（一切万有）の真価を礼拝し活かそうとする宗教である。

一部八卷四七品 六万九千三八四

一々文々是真仏 真仏説法利衆生

それを人間生活に人間行動にフルにはたらいした人、「法花経の行者」の魂が尊いのである。

○今、順序として、この人と山との関係のその荒すじを考えよう。

塚原問答というのは、佐渡に流され荒涼たる塚原、三昧堂前に展開された諸宗の僧俗男女の群衆、一種の公場対決である。公的権力の一端本間氏の一党が監視する。大風の前の小枝草葉、殆んど問答にも話にもならぬ位である。宗論果ててみなみなかえり去っていく。本間氏もいざ辞去しようとする袖をとらえて言はれた。内乱の予言である。半信半疑、をそるをそると帰っていったが一ヶ月後、早船がつく。「全くイザカマクラ」の出で立ちでかけつけたのはこの塚原の三昧堂である。そして第三諫の念いをこめてさとされた一撈がある。そして幾十日後内乱はてて帰島し來った本間は告白する。又幕府の内情をきいて考えられたであろう。こうした無量の感慨で筆とられたのが、開目抄で「この書の意は日蓮によりて日本国の有無はあるべし。」

その中の必死の祈願が有名な三大誓願、「我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん。我れ日本の大船とならん等と誓いし願、やぶるべからず。」とはいひ条、本とうの対決、効果あらしめることはなかなかむつかしいと感じられた。

「為人臣之礼不顕諫、三諫而不聴則逃之。」

子之事親也、三諫而不聴則号泣而随之」

(人臣ノ礼タルハ 顕ハニハ諫メズ。三タビ諫メテ聴カレズンバ則チ之ヲ逃ル。

子ノ親ニ事ウルヤ、三タビ諫メテ聴カレズンバ則チ号泣シテ之ニ随フ。)

この覚悟は、第一諫のときにすでに堅められたことであろう。それからの鎌佐往復の子檀の話から察しても、三諫して容れられることも難しかろう。それでは鎌倉にそのままは居れないであろう。居ってはならないであろう。しか

らば去ったら何処へ。或は流浪し或はどこかの山奥にかくれるか。ともかく条件といへば不遠・不近である。不遠とは国の安危の大憂がひかえている。一時も早くにききたいのである。不近とはいわゆる世間の俗眼の卑しい感情をシゲキしない為もあるが、為政者に深い反省を促そうとするのである。何処かこの不近・不遠の土地について考えられた。これまで自身で歩いた土地はまづ遊学時の叡京上下である。房総巡化と北富士の遊化である。この辺、我々の調査は余り調査は未だ行き届いてはいないが、いろいろお考えの対象地は相当広いものであろう。

おおよその見当では、御自分で行かれた所ではないが、話について聞いた、甲州のハキミノブという山地のこと。偶然にか故意にか問合はされたのではなからうか。現に残っている御書、この年次に当るのがある。「波木井三郎殿御返事」(七四五) 文永十年八月三日付、宛名は「甲斐国南部六郎三郎殿御返事」となっている。之は御眞蹟はないとしても六老興師の写本が北山本門寺蔵の標示が波木井とあって御筆の名宛は南部である。之は波木井氏の通称名であり、どこに住居したかにかかわってくるかもしれない。それらはともかくとして今、此御書のまっ先きに、

「鳥跡飛来晴不審疾風卷重雲如向明月」

(晝状の飛び来る、不審の晴るること、疾風の重雲を巻いて明月に向うが如し。) という大聖人の心中の鬱積したものを吹飛ばして明月を仰ぐがごとくであるという、並々ならぬ事態があったことをものがたる。しかしそれ以上はよくわからない。以下、「但此法門当世人論上下 難取信心 其故修行仏法 現世安穩後生善処等云々。而日蓮法師 雖称法花経行者 多留難 当知不叶仏意欺等云々。この問題の解決が以下漢文体で徹底してお示しになって末の方に到って、

「当ニ知ルベシ。残ル所ノ本門ノ教主・妙法五字、一閻浮提ニ流布センコト疑ヒ無キ者力。但シ日蓮法師ニ度々之

ヲ聞キタルノ人々猶ホ此大難ニ値フノ後之ヲ捨ツルカ。貴辺ハ之ヲ聞キタマフコト一兩度一時二時カ。然リト雖モ未ダ捨テタマハザル御信心ノ由之ヲ聞ク。偏ニ今生ノ事ニ非ジ。」(中略)そしてさらに、「彼ヲ以テ之ヲ推スルニ末代ノ惡人等ノ成仏・不成仏ハ罪ノ輕重ニ依ラズ。但ダ此經ノ信・不信ニ任スベシ。而ルニ貴辺ハ武士ノ家ノ仁、晝夜殺生ノ惡人也。家ヲ捨テズシテ此所ニ至テ何ナル術ヲ以テカ三惡道ヲ脱ルベキヤ。能々私案有ルベキカ。法花經ノ心ハ當位即妙不改本位ト申シテ罪業ヲ捨テズシテ仏道ヲ成ズル也(以上は私に述べ書きにす。)

天台云他經但記善不記惡今經皆記等云々。妙樂云唯円教意逆即是順 自余三教逆順定故等云々。爾前分々得道有無事 雖可記之知名目人申之也。雖然大體教之弟子有之 召此輩等粗聞其時可記申之」と結ばれている。追て書きには鎌倉在住の弟子数名の名を記して法門をさくように書かれている。まことに生易しい事ではない。

これから半年、文永十一年二月の赦免、三月末に鎌倉着、四月八日の第三諫、その後はあのていたらく。さてそれからの一ヶ月間、いろいろあったらしい。「人々のことばさまざまだったが存する旨ありしによつて」と書かれた。よく説教師の口ぐせの「愛染堂三千町歩」ということは、いわゆる口調のよさから出たことだろうが、実は富士門流の伝説には某々の寺塔の別当の話はあったらしい。——そういう煩はしさや誘惑やら罪障じみたことが起るにちがいないから急いで去らねばならないのかもしれない。去るもの去られるもの互にいいいようのない悶情である。点々とお別れの弟子檀越方の血の涙を流したところは幾箇所だろうか。身延までお供したものは五人位か。

十二日 さかわ(酒匂)、十三日 たけのした(竹ノ下)、十四日 くるまがへし(車返)、十五日 ををみや(大宮)、十六日 なんぶ(南部)、十七日 このところ。

いまだ さだまらずといえども、たいし（大旨）は この山中、心中に叶<sup>かな</sup>て候へば、しばらくは候はんずらむ。

結句は一人になって 日本国に流浪すべき み（身）にて候。又ちとどまるみ（身）ならば、けさん（見参）に入候べし。恐々謹言

十七日

ときどの

日 蓮 花押

（はじめの方に添え書きして）

けち（飢渴）申すばかりなし。米一合もうらず。がし（餓死）しぬべし。

此御房たちもみなかへして 但だ一人候べし。このよしを御房たちにも かたりさせ給へ。

この御状によって気がつくことは、旅程と日数のこと、当時としては相当の険路とせば、或は当然であろう。十六日南部について忽ち仰望されたのは身延山容である。あれから山路を辿ってくる途中幾度か仰がれるが、たしか南部の一角での第一印象は快かつたであろう。十七日いいよ、「このところ」はたして今のどこであろうか。どうも梅平ではないらしい。ハキイという以上、やはり波木井、旧地は城山とかカンノタイラとかいう辺であろう。その南部氏の館から翌日あたりから諸方歩かれたであろう。この御状は到着早々で少々は歩かれても、まだ決定はされない時点。山中が幽寂そのものが大そうお気に入られたのであろう。「結句一人になって流浪」とは之こそあの御一生の経路の人でなくてはいいい得ない覚悟のほどではなからうか。またこの先き、安居引退の地ではない。どこでどうなるかわからのである。むしろこの度の山入りは、苦行の入山であろうが、又どこへ流れゆくかわからない運命であり

そして又々その覚悟でもある。生じつか、口に出して言える事ではないが、心中、国土の宿命も罪業も全部せをうてをられる、何とかして神国宝土を全うして救ひ挙げたいのである。どこか流れ流れて居よいところ住みよいところをさがしていくような気持はない、縁ある人に会って法を説くような意図もない。外から見た目にはどう写っていたであろう。その一端はたしかにある。特にどう変つてるとはいえないが、しいていえばいわゆる常経である。大聖人お一人の行である。観である。その消息をうかがえるのが、かの行学朝師の元祖化導記に引かれている行法日記である。之は身延山第二世、六老の日向上人の記とされている。それから推して考えられるのは当然、御著作であり御消息であり、御本尊図顕である。これらはみな現物がそろっているから疑いをさしはさむことはできないが、法花経に關する御講義も計画的になされたようである。御義口伝というのはしばらく措き、日向記といはれた「御講聞書」という別名をもつもので、御講義の事実はたしか行はれたであろう。そのはじめに、

自弘安元年戊寅三月十九日 連々御講

至同三年五月二十八日 仍記之之畢

日向記之

とあって、終りにも同文がある。但し、上中下三卷あったらしく現存はその上の唯一巻である。昭和定本（二五九六）――

高祖大聖人御講聞書 上  
三帖内

とあるからである。その日数を算えると凡そ八〇三日となる。御義口伝はこれを模して作ったのではなからうかと私かに考える。

それから御研究といえるかどうかかわからないが、註法花経である。之はいつもおよみになる経であるが、それにひまの折りにはお経紙の表裏にこまごまと経釈の要文を抄記されている。この仕事も易しいようだが中々大へんである。面白そうなものを抜き書きして書きこむのとはちがつて、一切経蔵から御一生の体験から選り出された文々章句である。之についての後人の研究はこれからである。今後五〇〇年にできるかどうかかわからない。

なほ、伝説によれば、身延山頂五十丁の陰を時々老軀を挺して登られて、はるか父母師匠の御回向をなされたという。御自分はそのことについては何も書かれてはいないが、有名なあまのり御書（八六四）によれば、

ふるさとの事はるかに思ひわすれて候つるに今このあまのりを見候てよしなき心をもひいでて憂くつらし。かたうみ・いちかは・こみなとの磯のほとりにて昔見しあまのりなり。色・形・あちわひもかはらず。など我が父母かはらせ給ひけんと、かたちがへなる、うらめしさ、なみだをさへがたし。

#### 光日房御書（一一五九）

これほどの難かりし事だにも破れて鎌倉へ帰り入る身なれば又錦をきる辺もやあらんずらん。其時父母のはかをもみよかしと、ふかくをもうゆえに、いまに生国へはいたらねども、さすが恋ひしくて、吹く風立つ雲までも、東の方と申せば、庵をいでて身にふれ、庭に立ちてみるなり。

この豪毅至誠の聖者の衣の袖には何がつつまれていたのだろうか。弘安役の終ったところである。今までの漏りを赦ひ破れをつくろうてきた庵室を、大聖人の発意で改築なされたことである。それについて地引御書の外、お書きになっていないし伝説もない。ただ一つこの時に、「身延山久遠寺」という称号がつけられたと思う。久遠寺とは山名と連がって自然である。永遠性を無限にはらんでいるようだ。傍証は十四ヶ月後の墓番帳に出る。



○ここで一寸疑問を出してをこう。一体、宗祖は何故に身延に入られたのだろうか。三諫不容とはその動機である。その真意は法花経の御為めにちがいないが、もっと楽々と、花々しく、老人らしく、平和に往きそうなものだが、実はこれらと全く正反對にみえる。なぜだろうか。こうした御生活の中に流れているもの、底流は本当の御精神なのだろうが、それこそ立正安国・畢竟住一乗の御行動であろう。いわば神仏かけての祈りの場である。思えば三諫とカンタンにいえるが、三十九才以後の満二十年、惨風悲雨の呼吸、文永・弘安のあの両の大役を七年のうちに招いたのだ。退治したのだ。そのことについての文篇論議は、わざと避けておいでになったのではなからうかと思える。例えば対蒙古の一つの解釈が後世の弟子によって出されている。いわゆる「モーコタイジの旗マンダラ」がそれである。これは単なる偽作よりはズンと罪ふかいことであろう。ともかくすなほに大聖のゆくえをたどろう。何もとくに仰せにならない人が、翌弘安五年の九月八日、お山を出られた。老病の御身をいたわりかしづかれての十日、やうやくにして池上家にお着きになった。その前後事情をうかがう文篇、代筆ではある口授、絶筆である。今全文を掲げる。

畏<sup>かしこ</sup>み申候。みちのほど別事候はで池上までつきて候。道の間、山と申し河と申し、そこばく大事にて候ひけるを、公達に守護せられまいらせ候て、難もなくこれまで着きて候事、をそれ入り候ながら悦び存じ候。さてはやがて婦り参り候はんずる道にて候へども、所<sup>そ</sup>勞<sup>ろう</sup>の身にて候へば、不定<sup>ふじょう</sup>なる事も候はんずらん。さりながらも、日本国にそこばくもてあつかうて候身を九年まで御婦依候ひぬる御心ざし、申すばかりなく候へば、いづくにて死に候とも、葬をば身延のさわにせさせ候べく候。

又くりかげの御馬は、あまりをもしろくをばへ候程に、いつまでもうしなうまじく候。ひたちのゆへひかせ候はんとと思ひ候がもし人にもぞとられ候はん。又そのほか、いたはしくをばへば、ゆよりかへり候はんほど、かづさの

もばら殿のもとにあづけをきたてまつるべく候に、しらぬとねりをつけて候ては、をばつかなくをばへ候。まかりかへり候はんまで、此とねりをつけをき候はんとぞんじ候。そのやう（様）を御ぞんちのために申候。恐々謹言

九月十九日

日蓮

進上波木井殿 御侍

所労のあひだ、はんぎやうをくはへず候事、恐入候。

これはごく短いものだが重要な件が幾つかある。はんぎやうのことは、ずい分と御疲労の様子である。それにしても乗って来られた馬に対する愛情は一しをである。しかも、もばらどのというのは上総の御信者檀越である。佐渡向師のゆかりの人らしい。池上からはかなり遠い。帰途に便するやうにという意味は、あれは小湊の方へおまわりの道をお考えになったのではなからうか。すると、この度御出山の表向きは、ひたちのゆ（湯治）と、できれば御墓参を期せられたやうである。ここでついでに一言したいのは、正月の年頭会に身延山に於て飛馬式のあるのは、実は佐渡向師の開山の茂原の藻原寺にこのお馬の行事があったのが身延山にも採用されるに至ったものだという。

次にお墓のことだが、之は多分御在山中に南部殿にはお話しがあったものと思うし、昨年大坊建築の時からすでに永遠の計画の中に盛られていたことであろう。この御遺状には九年安居のできた御礼の報謝として南部氏永遠の法勲を顕彰される所以ともなった。一念三千・一心法界の談の中では小さいようだが、人間の歴史的現実における権力と宗教的権威のはり合う世界には、こうした墓地もお考えにならなくてはならなかったのであろう。若しもそのことを特に仰せにならなかったとしたら、どうであらう。当然六老方・大檀那方の相談。ゆかりの地としての鎌倉、お生れ

の地・父母のお墓の地の小湊、すぐ近くの池上、それから遠くの今の身延。四つは甲乙つけがたい理由かもしれないが、私案するに、やはり大坊建築のときにふくまれていたようだ。而もそれは文永弘安の両役、しかも三諫一乗の立正安國に発していることは疑いないであろう。ここに一つの伝説をつけてをく。御入滅の時、御屍体について、「焼かずにそのまま身延に送り届けてほしい。」というおことばについて、旧本身延山御書類聚に

日朝師身延山御書之鈔下ニ云ク 下総国平賀本土寺開山日朗直弟日典（伝か）ノ書ヲ載セラレタ物ノ本ニ云ク、高祖聖人池上ニヲイテ御終焉之尅<sup>トキ</sup>ノ仰ニ云ク「我ガ入滅ノ後ハ全身ヲ瓶<sup>ビヤウ</sup>ニ収メテ身延山ヘ送ベシ」トノ玉ヒケレバ、日朗申サク「御存生ノ時サヘ御一身ニヲイテ心安ク往復有リ難ク御ハシマシ事歴然ナリ。然ルニ御入滅ノ後、全身ヲ一日半日ナリトモ、届ケ申シカタカルベシ。況ンヤ、五日六日ノ道スガラ野山ニ臥ス様ニシテハ如何様ニ送リトツケマイラセンヤ。」然ルベカラザルノヨシ申サレタリケレバ、上人仰セアリ。「加様<sup>カヨウ</sup>ニ申ス処、ゲニモノナリ。サラバ日朗、宜シキ様ニ計ヒ玉ヘ」ト仰セアリケル間、イササカ池上ニヲイテ火葬ニシタテマツリ御身骨ヲ悉クコレヲ収メ奉ル。全身ノゴトクシタタメテ身延ノ沢ヘ送リトツケ奉リ、御墓ヲ建立シ、老・中・若ノ三輩ノ御弟子十二月ノ御番ヲ勤メラルルノ由、シルシヲカレタリ。」（下略）（加様ニ当山ノ事ヲハ執心ニ思食<sup>オモハシ</sup>メシケルニヤ。末弟如何トシテ輕易<sup>オウイ</sup>ノ思ヒヲナスヤラン。可レ歎レ之。）

そうして、今日我々が御真骨堂にひれふして、

なにゆえにくだきしほねのなごりぞと

おもへばそでに玉ぞちりける。

なにゆえにくだきしほねのなごりぞと

おもへばわれらよみがえるかな。

○今少し余白を仮りて、別の次元で考えてみる。池上家のことがその後どうしているかという気がかりもあるし、もっと重いことは鎌倉近郷から寄って来れる人々によってもらい立正安国の大義、（今までとはまたちがう筋金入りの）確信のもとに叫びたかったのではなからうか。というのは、九年前の入山のとき、泣く泣く逐はれるように山にげ入ったみじめさ、その好格を、ああ入山丁度百ヶ月になる、聖生活でようやくにとのえることができると思はれたであろう。伝説によれば九月二十五日、この最期の公式御説法、立正安国の大義を演べたまうた由。それからずっと御重態、十月十三日正午、突如地震、およみになる「お自我偈」を昭師がうけて一同唱和、途中で御入滅という。六老選定のこと、六人合議制で、異体同心せよとの御説であろう。

元祖化導記に

廿九 御身骨身延山奉移事 或記云任<sub>ニ</sub>御身骨<sub>ヲ</sub>御遺言<sub>ニ</sub> 十月廿一日池上ヨリ飯田（戸塚辺）マデ、廿二日湯本（箱根） 廿三日車返（沼津） 廿四日上野（大宮） 廿五日甲斐国入玉ヘリ 同十月廿九日ミソギヲ取り御影像建立在<sub>レ</sub>之 作者、御弟子日法 七々御仏事御入堂在<sub>レ</sub>之 一百ヶ日御墓立了 聴<sub>テ</sub>御舍利奉納等云々  
とある。この或記は何を指すか今分らない。

○まとめてみよう。棲神とは、日蓮大聖人のお魂の栖みたまうところ、この娑婆世界である。即ちそれを常寂光土という。末法万年・令法久住のゆえに。ことに信者たちの至心に唱えるそこにおいてになるのである。必ずしも殿堂伽

籃とか墓地とか御廟とかを要しない。いづこのところでも久遠劫来・本有常住の都なのである。——それだけならばことあらためてセイシンの議論も考究もいらんではないか。たしかにそうだ。たしかにそうであればこそ、ああした「法花経の行者」が出て来なければならぬ。特別の菩薩（本化地涌のボサツ）方が出て来て、ああいう行事が展開されたのである。この世の中が、あるがまま、あり来りのままの生活や生き方ややり方や信仰や行事であってはないからこそ、宗祖日蓮があのような御一代を示されたのではないか。だから日蓮の生きた動いたという一挙一動のあらゆるところそれだけ棲神の靈地なのである。この経の在るところ、読まれるところ、この題目の唱えられるところ、それぞれ棲神の聖地にちがいないが、その要領は、日蓮らしく心にもからだにもふるまうということ、日蓮の感応あらしめることである。スイッチを入れれば、宇宙万有が妙法としてはたらくのである。そのふしぎな機構あればこそ、泥海へドロの底から、蓮花の花がひらくのである。たちわたるみのうきぐもはれぬべし、たえのみのりのわしの山かぜ。の聖詠にあやかつて、法に依り人によらずして一すじにたちわたるみの うき雲をこゆ。日の一字いただくからは 当然と 我慢偏執 あるを許さず。あらふしぎ ニテン一六 生れ出た ひことひめたち 日のもとに満つ。

この山は あこがれ こがれ まいる山 ほねみうつめて まもりぬく山。

### 附

御入山七〇〇年に当り、「なにゆえにくだきし骨のなごりぞと思へば袖に玉ぞちりける」と「一上延山心愈悲」と心から合掌唱題できなくなった罪業の深さを思はしめられる。それにもいくつかのやむをえない事情が複雑にからんで聖滅一〇年まづ興尊の離山・六老分裂の禍は今日将来にも及んでいる。第二は門流分張は当然の常としてついつい

忘本立派となる。その傾をいましめたもの、<sup>②</sup>考えさせられるものがある。<sup>③</sup>第三は絶対権力からの弾圧不受不施は宗史の過半の致命傷となり、敵役となつた身延山の恨まれようも無理からぬところ。第四は明治維新の廃仏毀釈・国神遺文問題はしばらくをき、帝國憲法は制度生活を通じての支配はむしろ三宝に成り代つた。そして、ついに無条件降伏完全亡国が、眼前の事実。第五、日本中は主従師弟親子夫婦等の人倫秩序は全く無きが如く、殊にここ十年の地球を包む公害は人類四〇億の身心を傷めつつある。心から「南無末法唱導師」と仰ぎたい。身延のイミも棲神のイミもあらためて問われねばならぬ。

註 ① 冠鑑親師の論著・京本園寺十五世中道栖師の本迹問答抄Ⅱ身延山御書類聚（旧板）

② 波木井殿御書（一九二五）の成立。本寺參詣抄（二二七）

③ 清洲問答（身延山と本園寺との法嫡について）

④ 江戸中期以後、身延山不受退治のために種々奔走訴出ている。

⑤ 棲神の二字はいづ頃から使用されたかよくは分らないが、一六八〇年代身延図経に祖師堂に「応譚宝殿」御真骨堂拜殿に「栖神宝殿」の額が上っていたようだ。それから一〇〇年の間に祖師堂（廿八間ランカン一四一 $m$ 四方）に「栖神法窟」の大額（ $3m \times 6m$ ）が掲げられていたらしい。並川春山作の並川日記（一八五〇年ころ）、それから明治八年の大火後、鑑師筆の今の「棲神閣」となったようだ。（秋山先生の教示による。）